

## 学習観および学習方略に関する調査

下田 健治<sup>1</sup>, 名木田恵理子<sup>2</sup>, 中西 啓子<sup>3</sup>  
村中 明<sup>4</sup>, 内山 克良<sup>5</sup>, 山口 恒夫<sup>2</sup>

### Investigation of Entering Students' Ways of Thinking about Learning

Kenji SHIMODA<sup>1</sup>, Eriko NAGITA<sup>2</sup>, Keiko NAKANISHI<sup>3</sup>,  
Akira MURANAKA<sup>4</sup>, Katsuyoshi UCHIYAMA<sup>5</sup> and Tsuneo YAMAGUCHI<sup>2</sup>

キーワード：失敗に対する柔軟性，思考過程の重視，方略志向，意味理解志向

#### 概 要

本学全学科の平成15年度新入生を対象に，これまでの学習観や学習方略に関して4側面からの志向調査を行った。「失敗に対する柔軟性」については，失敗しても何とかしていこうという気持ちと，失敗の原因を明確にして行動化することには消極的，という相反した特徴がみられた。「思考過程の重視」については，学科により傾向にばらつきがあったが，答えを出すまでの考え方を大切としているものの，一つの回答ができればその他の解き方を考えるような粘り強さは低かった。「方略志向」については，成功した人の勉強の仕方に多くが関心を示すが，自分で勉強の仕方の質の見直しや，工夫に対する関心を示さなかったものの，もっと勉強すれば何とかなるといふエネルギーは持っていることが示唆された。「意味理解志向」では，理解することの大切さは認めているものの，物事を関連付けたり，理解しやすいように，図表化するのが苦手な傾向を示した。

#### 1. はじめに

本学への入学動機の主なものは，資格を取得したい，専門的知識・技能を身につけたいということである<sup>1)</sup>。医療関係の知識・技能にかかわらず，何かを身につけるには，より良い学習観を持ち，効果的な学習方法を習慣化することが重要である。このことは資格修得という目標を達成するためだけでなく，卒業後の自己研修（自己学習）にとっても欠かせないものである。

本学では，入学後のより適切な教育指導を行うこと

(平成15年10月8日受理)

<sup>1)</sup>川崎医療短期大学 臨床検査科，<sup>2)</sup>川崎医療短期大学 一般教養，<sup>3)</sup>川崎医療短期大学 第一看護科，<sup>4)</sup>川崎医療短期大学 放射線技術科，<sup>5)</sup>川崎医療短期大学 事務部教務課

<sup>1)</sup>Department of Medical Technology, Kawasaki College of Allied Health Professions

<sup>2)</sup>Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

<sup>3)</sup>The First of Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

<sup>4)</sup>Department of Radiological Technology, Kawasaki College of Allied Health Professions

<sup>5)</sup>Educational Affairs Section, School Office, Kawasaki College of Allied Health Professions

を目的として，①入学前の学習状況等に関すること ②学習観，学習方略（方法）に関すること ③学習動機に関することの3区分についてアンケート調査を行った。本調査は平成15年度入学生全体を対象に調査したため，そのまま個人的な指導資料にすることはできないが，学科別に集計し，クラス単位で活用することで個人指導にも対応することをねらいとした。

本稿では，学習観および学習方略に関する各質問項目について，個々に回答率を検討し，より具体的にその動態を把握する資料とした。なお，本調査は，FD委員会の活動の一環として行ったものである。

#### 2. 調査方法

##### (1) アンケート調査方法

アンケート調査の対象，調査期間，回収方法は前報（下田ら，2003a）<sup>1)</sup>と同様である。なお，本稿でも，学科名の第一看護科を1N，第二看護科を2N，臨床検査科をMT，放射線技術科をRT，臨床工学科をME，介護福祉科をCWと略名で表記することにする。

質問項目については，市川(1995, 1998, 2001)<sup>2~4)</sup>の報告にしたがって，学習観および学習方略に関する質

問を、「失敗に対する柔軟性」、「思考過程の重視」、「意味理解志向」、「方略志向」の4区分とした。各区分における志向の強さを知るために、各区分に対して6質問事項（全体では24質問項目）を設け、ランダムな順序で呈示した質問項目に回答してもらった。回答のための選択肢は、「よく当てはまる」、「当てはまる」、「どちらともいえない」、「当てはまらない」、「まったく当てはまらない」の5段階方式にした。

## (2) 学習方法の心理尺度の算出方法

学習の仕方や考え方を数量的に評価するために、市川(1995, 1998, 2001)<sup>2-4)</sup>の方法にしたがって心理尺度を算出した。すなわち、学習方法に関する質問事項を5段階評価[5点(自分によく当てはまる)~1点(まったく当てはまらない);他は分析結果を参照]とし、その平均点を心理尺度の数値とした。

質問事項の「失敗に対する柔軟性」、「思考過程の重視」、「意味理解志向」および「方略志向」についての質問項目A~Cについては、前記の方法で心理尺度を算出した。質問項目D~Fについては、5段階評価の評価点を反転[5点(まったく当てはまらない)~1点(自分によく当てはまる)]して加算し、その値を6で割った数値を心理尺度とした。すなわち、「失敗に対する柔軟性」に関する質問事項を例にとると、質問項目A「思ったようにいかないとき、頑張っって何とかしようとするほうだ」、質問項目B「失敗を繰り返しながら、だんだん完全なものにしていけばいいと思う」および質問項目C「思ったようにいかないときには、その原因をつきとめようとする」については、5段階評価の得点の平均で心理尺度を算出した。これに対して、質問項目D「間違いをすると、恥ずかしいような気になる」、質問項目E「うまいいきそうもないと感じると、すぐやる気がなくなってしまう」および質問項目F「失敗すると、すぐがっかりしてしまうほうだ」については、5段階評価の評価点を反転[5点(まったく当てはまらない)~1点(自分によく当てはまる)]して加算し、その値を6で割った数値を心理尺度とした。つまり、このように算出された心理尺度の数値が高い場合には、質問項目A~Cではその数値が高ければプラス志向(志向性が高い)であることを、それに対して質問項目D~Fではマイナス志向(志向性が低い)であることを意味することになる。なお、心理尺度の数値を学科間で比較するために、学科ごとに集計した数値を回答した学生数で割って平均値を求めた。

一方、「よく当てはまる」および「当てはまる」と回答した数の合計数が、全回答数に占める割合を、肯定的な回答率とし、「当てはまらない」および「まったく当てはまらない」と回答した数の合計数が、全回答数に占める割合を、否定的な回答率とした。

## 3. 調査結果

### (1) 心理尺度の集計結果

四つの質問事項の心理尺度について、各学科および全学の平均値を示したのが表1である。

質問事項「失敗に対する柔軟性」では、全学の心理尺度の平均は3.10であった。最高値はMEの3.20、次いで2Nの3.16、1Nの3.10、さらに低かったのは、MTの3.02、RTの3.07、CWの3.06であった。質問事項「思考過程の重視」では、全学の心理尺度の平均は3.23であった。最高値はRTの3.48、次いでMEの3.31、MTの3.21、低かったのはCWの3.12、2Nの3.18、1Nの3.19であった。また、質問事項「方略志向」では、全学の心理尺度の平均は3.16であった。最高値は2Nの3.30、次いでRTの3.22、1Nの3.21、低かったのはMEの3.06、MTの3.06、CWの3.12であった。さらに質問事項「意味理解志向」では、全学の心理尺度の平均は2.93であった。最高値はMTの3.06、次いでRTの3.01、MEの2.96、低かったのはCWの2.81、2Nの2.92、1Nの2.91であった。

### (2) 質問項目と回答率

#### 1) 質問事項「失敗に対する柔軟性」

この質問事項に関する6質問項目(A~F)についての調査結果を図1に示す。得られた回答から求めた肯定的な回答と否定的な回答の割合は以下のようになった。

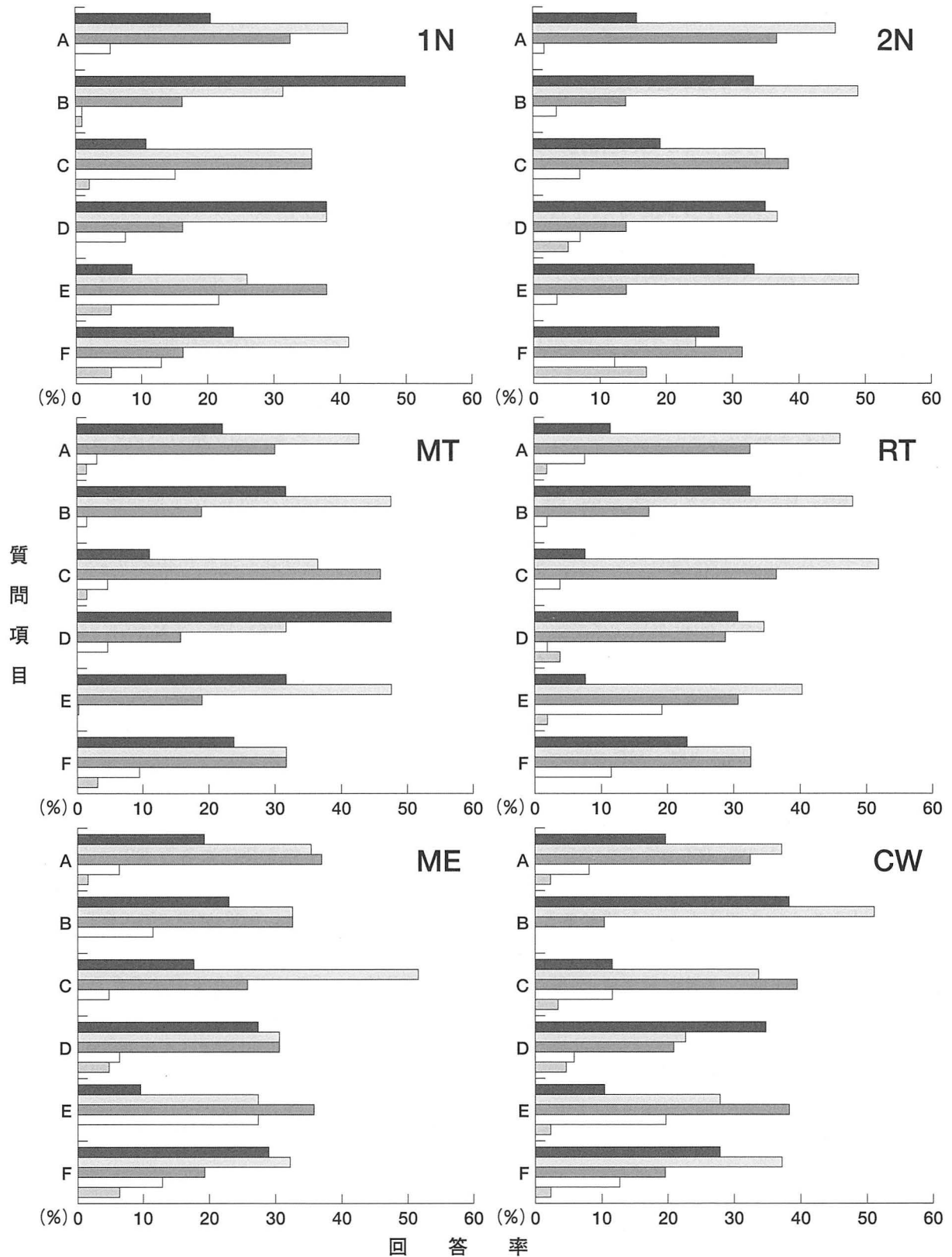
**質問項目A. 「思ったようにいかないとき、頑張っって何とかしようとするほうだ」**

各学科の肯定的な回答は、1Nが61.9%、2Nが61.3

表1 学習観および学習方略に関する調査

学 科	学習観および学習方略の心理尺度*			
	失敗に対する柔軟性	思考過程の重視	方略志向	意味理解志向
1 N	3.10	3.19	3.21	2.91
2 N	3.16	3.18	3.30	2.92
MT	3.02	3.21	3.06	3.06
RT	3.07	3.48	3.22	3.01
ME	3.20	3.31	3.06	2.96
CW	3.06	3.12	3.12	2.81
全 体	3.10	3.23	3.16	2.93

\*心理尺度の平均値(調査方法参照)



〈質問項目〉 A 「思ったようにいかないとき、頑張って何とかしようとするほうだ」、B 「失敗をくり返しながら、だんだん完全なものにしていけばいいと思う」、C 「思ったようにいかないときには、その原因をつきとめようとする」、D 「間違いをすると、恥ずかしいような気になる」、E 「うまくいきそうもないと感じると、すぐやる気がなくなってしまう」、F 「失敗すると、すぐがっかりしてしまうほうだ」。  
 〈回答の選択肢〉 よく当てはまる■、当てはまる□、どちらもいえない□、当てはまらない□、まったく当てはまらない□。

図1 各学科における「失敗に対する柔軟性」に関する質問項目の回答率

%, MT が65%, RT が57.6%, ME が54.7%, CW が56.9%で, すべての学科が50%以上であった。否定的な回答は, 1 Nが5.4%, 2 Nが1.7%, MT が4.6%, RT が9.5%, ME が8.0%, CW が10.4%であった。

**質問項目 B. 「失敗をくり返ししながら, だんだん完全なものにしていけばいいと思う」**

各学科の肯定的な回答は, 1 Nが81.5%, 2 Nが82.3%, MT が79.3%, RT が80.6%, ME が55.6%, CW が89.4%で, ME を除いて他の学科は80%以上であった。否定的な回答は, 1 Nが2.0%, 2 Nが3.5%, MT が1.5%, RT が1.9%, ME が11.5%, CW が0%であった。

**質問項目 C. 「思ったようにいかないときには, その原因をつきとめようとする」**

各学科の肯定的な回答は, 1 Nが46.6%, 2 Nが54.2%, MT が47.6%, RT が59.5%, ME が69.3%, CW が45.3%で, 大半の学科が50%前後であったが, ME は他学科に比べてやや高いのが特徴的であった。否定的な回答は, 1 Nが17.3%, 2 Nが7.0%, MT が6.2%, RT が3.8%, ME が4.8%, CW が15.0%であった。

**質問項目 D. 「間違いをすると, はずかしいような気になる」**

各学科の肯定的な回答は, 1 Nが76%, 2 Nが71.8%, MT が79.3%, RT が65.3%, ME が58%, CW が68.5%で, 70%前後の学科が大半であったが, ME がやや低いのが目立った。否定的な回答は, 1 Nが7.6%, 2 Nが12.2%, MT が4.7%, RT が5.7%, ME が11.2%, CW が10.4%であった。

**質問項目 E. 「うまくいきそうもないと感じると, すぐやる気がなくなってしまう」**

各学科の肯定的な回答は, 1 Nが34.6%, 2 Nが82.3%, MT が79.3%, RT が47.9%, ME が37%, CW が38.3%で, 1 N, RT, ME, CW は40%前後であるが, 2 N, MT は約80%であった。否定的な回答は, 1 Nが27.1%, 2 Nが3.5%, MT が0.2%, RT が21.1%, ME が27.4%, CW が23.0%であった。

**質問項目 F. 「失敗すると, すぐにがっかりしてしまうほうだ」**

各学科の肯定的な回答は, 1 Nが65.2%, 2 Nが52.5%, MT が55.5%, RT が55.6%, ME が61.2%, CW が65.1%で, すべての学科が60%前後であった。否定的な回答は, 1 Nが18.4%, 2 Nが13.9%, MT が12.6%, RT が11.5%, ME が19.3%, CW が15.0%であった。

## 2) 質問事項「思考過程の重視」

この質問事項に関する6質問項目(A~F)についての調査結果を図2に示す。得られた回答から求めた肯定的な回答と, 否定的な回答の割合は以下のようになった。

**質問項目 A. 「答えだけでなく, 考え方が合っていたかが大切だと思う」**

各学科の肯定的な回答は, 1 Nが74.9%, 2 Nが57.8%, MT が74.5%, RT が80.7%, ME が88.6%, CW が54.5%で, 2 N, CW を除く他学科は70%以上なのが特徴的であった。否定的な回答は, 1 Nが6.5%, 2 Nが14.0%, MT が4.6%, RT が1.9%, ME が3.2%, CW が5.7%であった。

**質問項目 B. 「ある問題が解けたあとでも, 別の解き方をさがしてみることがある」**

各学科の肯定的な回答は, 1 Nが18.4%, 2 Nが17.5%, MT が20.5%, RT が38.4%, ME が30.5%, CW が20.8%で, 全学科を通じて40%以下であったが, 中でも2 N, MT, CW は約20%なのが目立った。否定的な回答は, 1 Nが64.1%, 2 Nが64.8%, MT が58.6%, RT が32.6%, ME が53.1%, CW が55.7%であった。

**質問項目 C. 「テストでできなかった問題は, あとからでも解き方を知りたい」**

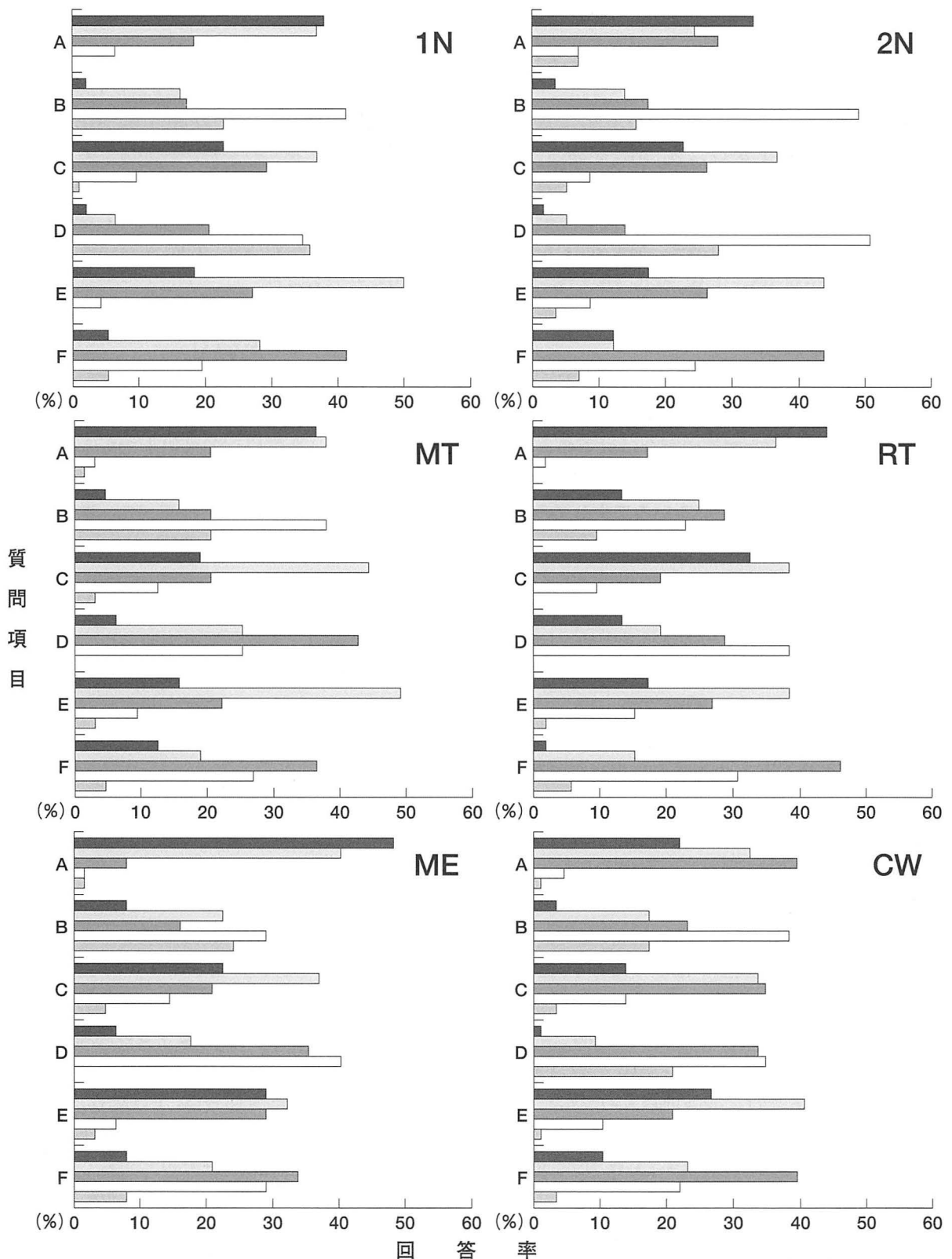
各学科の肯定的な回答は, 1 Nが59.7%, 2 Nが59.6%, MT が63.4%, RT が71%, ME が59.5%, CW が47.6%で, 全体を比較すると RT が最も高く, CW が最も低い回答であった。否定的な回答は, 1 Nが10.7%, 2 Nが13.9%, MT が15.7%, RT が9.6%, ME が19.3%, CW が17.3%であった。

**質問項目 D. 「なぜそうなるのか分からなくても, 答えが合っていればいいと思う」**

各学科の肯定的な回答は, 1 Nが8.6%, 2 Nが6.9%, MT が6.3%, RT が13.4%, ME が6.4%, CW が10.4%で, 全学科を通じて10%前後であった。否定的な回答は, 1 Nが70.5%, 2 Nが78.8%, MT が68.1%, RT が67.2%, ME が75.7%, CW が55.7%であった。

**質問項目 E. 「テストでは, 途中の考え方より, 答えが合っていたかが気になる」**

各学科の肯定的な回答は, 1 Nが68.4%, 2 Nが61.3%, MT が65%, RT が55.7%, ME が61.2%, CW が67.3%で, 全学科を通じて60%前後であった。否定的な回答は, 1 Nが4.3%, 2 Nが9.2%, MT が12.6%



〈質問項目〉A 「答えだけでなく、考え方が合っていたかが大切だと思う」、B 「ある問題が解けたあとでも、別の解き方をさがしてみることもある」、C 「テストでできなかった問題は、あとからでも解き方を知りたい」、D 「なぜそうなるのか分からなくても、答えが合っていればいいと思う」、E 「テストでは、途中の考え方より、答えが合っていたかが気になる」、F 「自分で解き方をいろいろ考えるのは、めんどくさいと思う」。  
 〈回答の選択肢〉よく当てはまる■, 当てはまる□, どちらともいえない■, 当てはまらない□, まったく当てはまらない□。

図2 各学科における「思考過程の重視」に関する質問項目の回答率

%, RT が17.2%, ME が9.6%, CW が11.5%であった。

**質問項目 F. 「自分で解き方をいろいろ考えるのは、めんどくさいと思う」**

各学科の肯定的な回答は、1 Nが33.6%, 2 Nが24.4%, MT が31.6%, RT が17.2%, ME が28.9%, CW が33.6%であった。ほぼ全学科が30%前後の肯定的な回答で、RT がやや低い回答であった。否定的な回答は、1 Nが24.9%, 2 Nが31.5%, MT が31.6%, RT が36.4%, ME が37.0%, CW が25.4%であった。

### 3) 質問事項「方略志向」

この質問事項に関する6質問項目(A~F)についての調査結果を図3に示す。得られた回答から求めた肯定的な回答と否定的な回答の割合は以下のようになった。

**質問項目 A. 「勉強の仕方をいろいろ工夫してみるのが好きだ」**

各学科の肯定的な回答は、1 Nが20.6%, 2 Nが35%, MT が17.4%, RT が30.7%, ME が24.1%, CW が29%で、ほぼ全学科が30%前後の肯定的な回答であるが、MT はやや低かった。否定的な回答は、1 Nが30.3%, 2 Nが22.7%, MT が44.3%, RT が28.8%, ME が33.8%, CW が34.8%であった。

**質問項目 B. 「成功した人の勉強の仕方に興味がある」**

各学科の肯定的な回答は、1 Nが91.2%, 2 Nが87.6%, MT が82.4%, RT が86.4%, ME が77.4%, CW が75.5%で、ほぼ全学科が80%以上であった。否定的な回答は、1 Nが4.2%, 2 Nが3.5%, MT が11.0%, RT が7.6%, ME が8.0%, CW が11.5%であった。

**質問項目 C. 「テストの成績が悪かったとき、勉強の量よりも方法を見直してみる」**

各学科の肯定的な回答は、1 Nが33.6%, 2 Nが35%, MT が22.1%, RT が34.5%, ME が24.1%, CW が33.7%で、ほぼ全学科が30%前後であった。否定的な回答は、1 Nが33.6%, 2 Nが22.7%, MT が26.9%, RT が34.5%, ME が29.0%, CW が22.0%であった。

**質問項目 D. 「勉強の方法を変えても、効果はたいして変わらないと思う」**

各学科の肯定的な回答は、1 Nが6.4%, 2 Nが1.7%, MT が7.8%, RT が7.6%, ME が20.9%, CW が6.9%で、他学科に比べてMEが高いが目立った。否定的な回答は、1 Nが53.2%, 2 Nが64.8%, MT が

47.5%, RT が61.4%, ME が53.1%, CW が51.1%で、ほぼ全学科が50%以上であった。

**質問項目 E. 「学習方法を変えるのはめんどくさい」**

各学科の肯定的な回答は、1 Nが12.9%, 2 Nが29.8%, MT が26.9%, RT が30.7%, ME が27.3%, CW が20.8%で、多くの学科が約30%であったが、1 NとCW がやや低いのが特徴的であった。否定的な回答は、1 Nが32.5%, 2 Nが33.2%, MT が23.7%, RT が38.4%, ME が33.8%, CW が31.3%で、ほぼ全学科が30%台であった。

**質問項目 F. 「成績を上げるには、とにかく努力してたくさん勉強するしかない」**

各学科の肯定的な回答は、1 Nが71.6%, 2 Nが61.3%, MT が76.1%, RT が71%, ME が85.4%, CW が66.2%で、全学科が60%以上であるが、ME の回答はやや高く、2 NとCW の回答がやや低いが目立った。否定的な回答は、1 Nが2.0%, 2 Nが6.9%, MT が7.8%, RT が11.5%, ME が6.4%, CW が8.1%であった。

### 4) 質問事項「意味理解志向」

この質問事項に関する6質問項目(A~F)についての調査結果を図4に示す。得られた回答から求めた肯定的な回答と否定的な回答の割合は以下のようになった。

**質問項目 A. 「ただ暗記するのではなく、理解して覚えるように心がけている」**

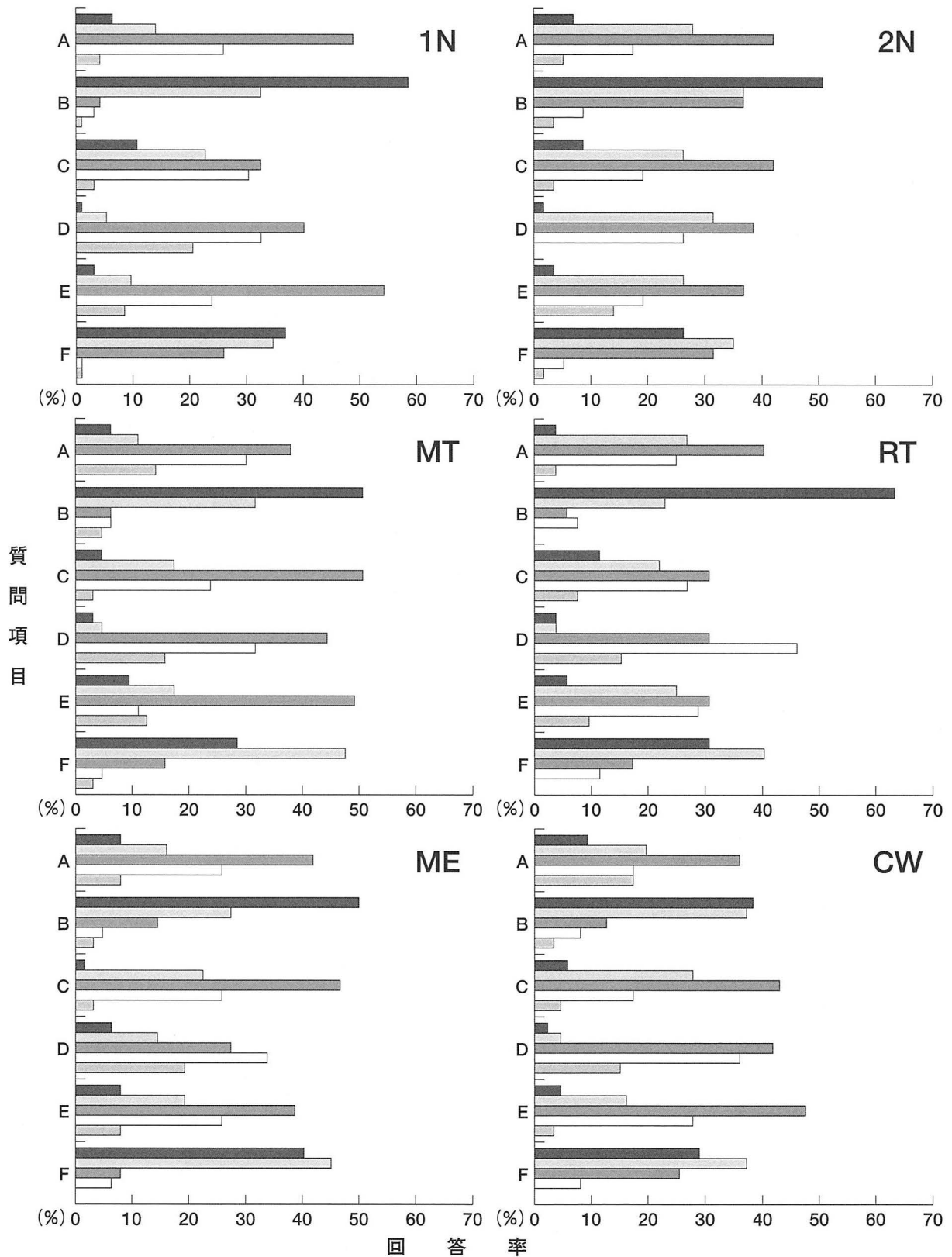
各学科の肯定的な回答は、1 Nが68.4%, 2 Nが64.8%, MT が65%, RT が69.2%, ME が66.1%, CW が58%で、ほぼ全学科が60%以上であった。否定的な回答は、1 Nが2.1%, 2 Nが8.7%, MT が9.4%, RT が7.6%, ME が4.8%, CW が11.5%であった。

**質問項目 B. 「習ったことどうしの関連をつかむようにしている」**

各学科の肯定的な回答は、1 Nが41.2%, 2 Nが50.8%, MT が44.4%, RT が40.3%, ME が40.2%, CW が38.3%で、ほぼ全学科が40~50%であった。否定的な回答は、1 Nが6.5%, 2 Nが6.9%, MT が14.2%, RT が17.2%, ME が12.8%, CW が18.5%であった。

**質問項目 C. 「図や表で整理しながら勉強する」**

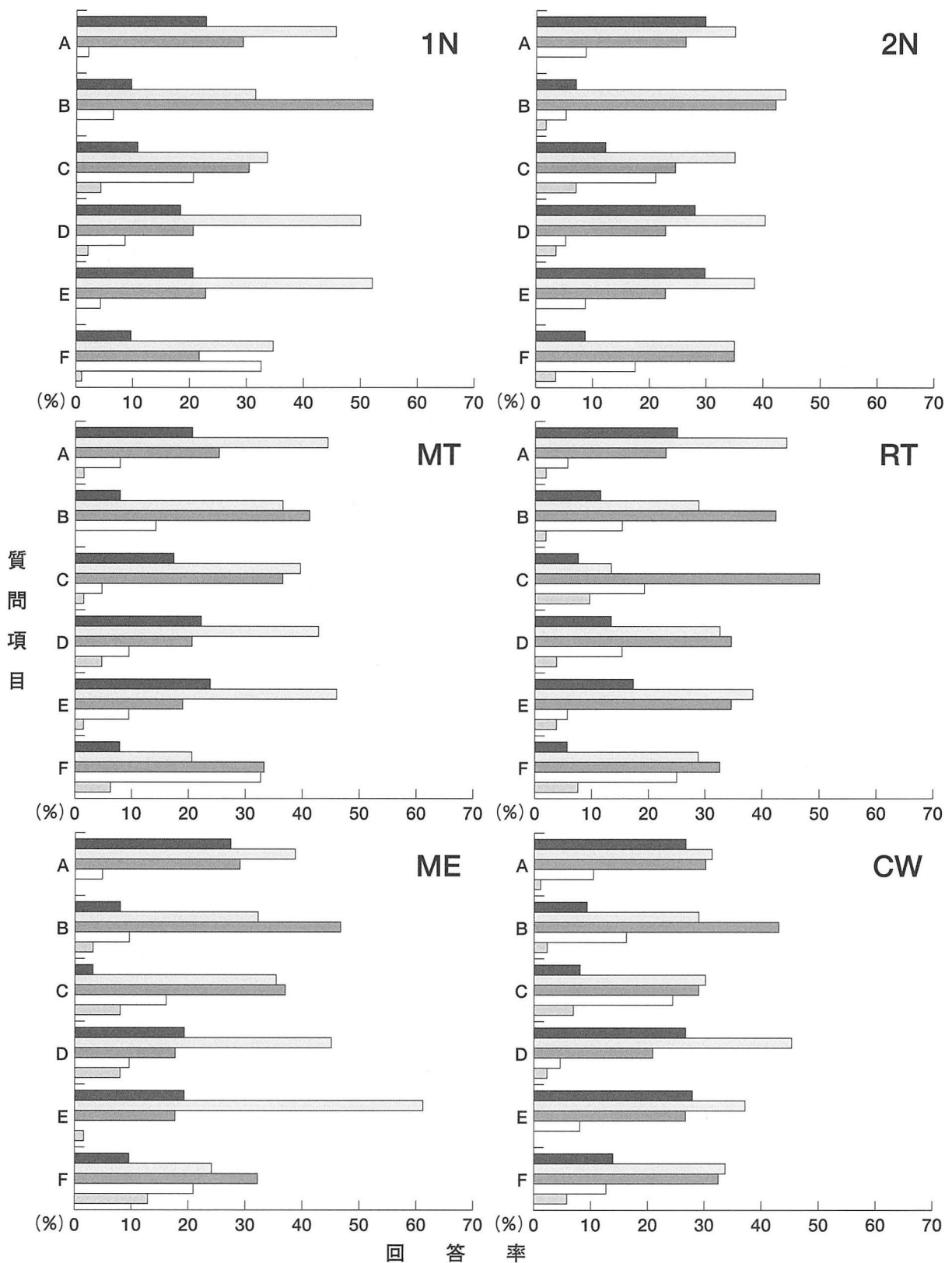
各学科の肯定的な回答は、1 Nが44.4%, 2 Nが47.2%, MT が57%, RT が21%, ME が38.6%, CW が38.3%で、全学科を通じて学科が40%前後であるが、MT はやや高く、RT はやや低いのが特徴的であった。



〈質問項目〉A 「勉強の仕方をいろいろ工夫してみるのが好きだ」、B 「成功した人の勉強の仕方に興味がある」、C 「テストの成績が悪かったとき、勉強の量よりも方法を見直してみる」、D 「勉強の方法を変えても、効果はたいして変わらないと思う」、E 「学習方法を変えるのはめんどろだ」、F 「成績を上げるには、とにかく努力してたくさん勉強するしかない」。

〈回答の選択肢〉よく当てはまる■、当てはまる□、どちらともいえない■、当てはまらない□、まったく当てはまらない■。

図3 各学科における「方略志向」に関する質問項目の回答率



〈質問項目〉A 「ただ暗記するのではなく、理解して覚えるように心がけている」、B 「習ったことどうしの関連をつかむようにしている」、C 「図や表で整理しながら勉強する」、D 「数学の問題では、公式を覚えることが大切だと思う」、E 「同じパターンの問題を、何回もやって慣れるようにする」、F 「なぜそうなるのかはあまり考えず、暗記してしまうことが多い」。

〈回答の選択肢〉よく当てはまる■、当てはまる□、どちらもいえない□、当てはまらない□、まったく当てはまらない□。

図4 各学科における「意味理解志向」に関する質問項目の回答率



否定的な回答は、1 Nが24.9%，2 Nが28.0%，MTが6.2%，RTが28.8%，MEが24.1%，CWが31.3%であった。

#### 質問項目D.「数学の問題では、公式を覚えることが大切だと思う」

各学科の肯定的な回答は、1 Nが68.4%，2 Nが68.3%，MTが65%，RTが46%，MEが64.4%，CWが72%で、全学科を通じての回答が60～70%であったが、中でもCWはやや高く、RTは低い特徴を示した。否定的な回答は、1 Nが10.7%，2 Nが8.7%，MTが14.2%，RTが19.1%，MEが17.6%，CWが6.9%であった。

#### 質問項目E.「同じパターンの問題を、何回もやって慣れるようにする」

各学科の肯定的な回答は、1 Nが72.7%，2 Nが68.3%，MTが69.8%，RTが55.7%，MEが80.5%，CWが65.1%で、ほとんどの学科が70%前後であったが、中ではMEはやや高く、RTはやや低かった。否定的な回答は、1 Nが4.3%，2 Nが8.7%，MTが11.0%，RTが9.5%，MEが1.6%，CWが8.1%であった。

#### 質問項目F.「なぜそうなるかはあまり考えず、暗記してしまうことが多い」

各学科の肯定的な回答は、1 Nが44.4%，2 Nが43.7%，MTが28.5%，RTが34.5%，MEが33.7%，CWが47.6%で、ほぼ全学科が40%前後であったが、MTがやや低いのが目立った。否定的な回答は、1 Nが33.6%，2 Nが21.0%，MTが39.0%，RTが32.6%，MEが33.8%，CWが18.5%であった。

## 4. 考 察

学習がうまくいかない学生に対応する際に留意すべき最も重要なことの一つは、学生がどのような学習方法で学習しているかを知ることである。これまでも成績不振者などに対して、それぞれの教員が多くのケースを通じて、さまざまな学習方法を提示してきたことは間違いない。しかし、それがどの程度個人指導に適切なものであったかの判断には、困惑するところが少なくない。このことを解決する一つの手立ては、提示した方法を学習者が実施することで学習に対する考え方が変わり、さらにそれを学習者自身が意識できるような環境（学習相談など）を整備することである。成績不振などの原因は、単に学習方法（学習スキル）だけの問題ではなく、学習方法の背後にある「学習とはどのようにして成立するのか」という学習の仕組みに

関する考え方（学習観）や、「学習は何のためにするのか」という学習動機や目的に関する考え方（学習動機）に深く関係しているのである。したがって、学生個人の学習方法を知ることや成績との関連を検討するだけでなく、学業不振がどのような学習観や学習動機によるものなのかを同時に吟味することが大切である<sup>4)</sup>。

学習観や学習方策を見る場合、個人を対象としたときには、個別の質問項目に関してその傾向を知ることが有効である。しかし、集団では学習観および学習方略に関してさまざまな考えをもっていることから、その対応は慎重でなくてはならない。本調査ではいずれの質問項目でも、またすべての学科で「どちらともいえない」という回答（心理尺度；3.0）で、全体的に際立った特徴は認められなかった。

「失敗に対する柔軟性」では、全体の心理尺度の平均は3.10であった。その中で2 Nはわずかではあるが高かった。「思ったように行かないときには、がんばって何とかしよう」とする学生が50～60%で、「失敗しながらも少しずつ完全なものにしていく」という気持ちを持った入学生が、ほとんどの学科で80%以上であった。多くの学生には、「失敗しながらもがんばって何とかし、少しずつ完全なものに」という気持ちのあることがうかがえる。しかし、「失敗の原因をつきとめよう」とすることについては、ME、RTを除いて50%以下であり、気持ちは何とかしたいと思っても、具体的に行動をおこすことには消極的であるといえる。一方で、間違いをすることを恥ずかしく思う入学生は70%前後と多く、がっかりしてやる気を失ってしまう入学生が40%前後、学科によっては約80%もみられた。このことは、うまくいなくても頑張ろうとする意欲を持続させるような対応は、慎重でかつ忍耐強く行わなければならないことを示唆している。

「思考過程の重視」という項目の心理尺度は、医療技術系であるRTでは3.48、MEでは3.31、MTでは3.21で、ほかの学科に比べてやや高い。このことは、これらの学科はいずれも理系コースからの学生が多いことに関係があるのかもしれない。

「答えだけでなく、考え方が合うことが大切である」とする思考過程の重視を、90%近くの学生は大切と考え、テストでできなかった問題の解き方を知りたいと望んでいる。しかし、テストで一つの答えを得たことを手掛かりにして、他の解き方を考えるという粘り強さを持った新入生は、40%程度で全体的に少ないといえる。

一方では、テストで答えだけがあっていればよいというのではなく、やはり自信を持って正解したいと考えており、充実志向が感じられる。しかし、テストでは、途中の考え方より解答の結果が気になるという回答が約60%で、設問によって相矛盾するような結果であるが、これはテストでは思考過程が評価されるより正解で成績が示されてきたことによると示唆される。本調査の結果を総合的に考えると、学生の本音は知識・考え方に自信を持ちたいと願っているのである。したがって、試験後に、学生に主体性のある補習などを企画し、知識を定着させて、自信につなげるような指導は有意義であろう。

「方略志向」については、各学科間の差も少なく、心理尺度の平均値は3.16であった。新入生は勉強の仕方を工夫することや、学習の質を見直すというような目立った傾向はみられない。

方略志向に関する質問事項で最も注目したのは、「成功した人の勉強の仕方に興味がある」ということに対して、ほぼ全学科の80%以上が肯定的な回答をしていたことである。このことは、学生の個性に添った学習指導とともに、学生が興味を示している「成功する勉強の仕方」を勉強する、いわば“勉強学”なるものを大学といえども開講する必要があることを意味している。「テストの成績が不良であるのは勉強量が少ないことに原因がある」と考えている学生は、どの学科も60%以上おり、学習時間を多くする努力が大切であることを学生自身が考えている。しかし、勉強方法を変えて学習効果を上げることについては、半数以上の学生がその効果が上がることを期待する反面、実際には、勉強方法を改善・工夫することを考えている学生は少ない。

本調査で明らかになった興味深い結果として、学生の多くはテストの結果などから自分自身の能力の限界を感じたり、無力感に陥り、自信喪失の状態に陥っていないことである。したがって、学生たちは、大学の対応次第では大きく伸びる可能性がある。そのためには、学習を習慣化するためにも日々の努力を評価し、勉強量を増やし、学習方法を指導するような教育計画の中で、仕組みをもっと作る必要があると考える。

全学の「意味理解志向」の心理尺度は2.93である。

このことは理解するために関連づけて学習することや、学習内容を図表化するなどの工夫が少ないことを示唆している。しかし、単なる反復による習熟では、学習効果を期待することは難しく、やはり得られた知識を構造化することや、関連付けによって学習が促進されることがすでに指導されている<sup>4)</sup>。暗記だけではなく、理解しようとしている学生がほぼ60%以上いるが、理解するために関連性を見つけたり、図表化したりするという志向は50%以下である。最初は多少戸惑うであろうが、学習の目指す知識を確実に身につけるための基本的な方向性は、できるだけ多くの関連性に注目し、その核となるもの同士を結びつけ、ネットワーク化することである。そこで知識がはじめて生きてくるのである。そして、これがより深い理解につながり、学習意欲の深化へと進むのである。脈絡のない断片的な知識の詰め込みは、その無力さにやがて学生の意欲を失わせ、失望させてしまう。すべてに意味を求めることは、学生の将来に向けた人間教育として必須のことであり、あまりにも意味のない学びの世界は、学生の眼に光を失わせるに違いない。

## 5. 謝 辞

本調査にご協力いただいた平成15年度入学生の皆さんに深く感謝いたします。また調査の円滑な実施に全面的にご協力いただいた各学科の担任をはじめ専任の先生方に心より感謝いたします。さらに膨大な量の調査結果の事務処理に関して、年度始めの多忙ななか貴重なチェックをしていただいた事務部教務課の方々、また調査結果のデータ処理について貴重な助言をいただいた一般教養の小林早苗先生に深謝いたします。

## 6. 文 献

- 1) 下田健治, 名木田恵理子, 中西啓子, 村中 明, 内山克良, 山口恒夫: 入学前の学習状況等に関する調査, 川崎医療短期大学紀要 23:1-8, 2003 a.
- 2) 市川伸一: 現代心理学入門3「学習と教育の心理学」, 東京: 岩波書店, pp. 1-34, 1995.
- 3) 市川伸一(編著): 「認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導」, 東京: プレイン出版, pp. 186-203, 1998.
- 4) 市川伸一: 「学ぶ意欲の心理学」, 東京: PHP 研究所, pp. 58-61, 2001.